

横浜市寺家地区の花暦

吉田 三夫

Floral calendar of Jike area in Yokohama City

Mitsuo Yoshida

I はじめに

神奈川県横浜市青葉区寺家町にある「寺家ふるさと村」は、横浜市の「ふるさと村」構想のひとつとして1987年に開村した。管理しているのは横浜市から委託を受けた四季の家管理委員会である。面積は86.1ヘクタールあり、散策路が設けられていて、全域が自然保護区になっている。施設としては、食事ができて研修室や農産加工室がある四季の家、郷土文化館、陶芸舎、釣堀、農産物直売所などがある。ここを訪れる人は多種多様で、行楽の人、昆虫観察の人、野鳥観察の人、植物観察の人などで、年齢層にも幅があり子どもから熟年層までいる。

夏の暑い日でも雑木林の中に入ると薄暗く幾分か涼しく感じられるし、開けた水田に出ると暑さが余計に感じられる。環境の変化に富んだ地域と言える。

この地域に関するまとまった自然に関する文献としては1987年刊行された「横浜ふるさと村自然と文化の会」による「寺家の自然」がある。この中には植物も含まれる。目録が中心で、20年前のもので花暦ではないので、今回、この地域の花暦の作成を試みた。

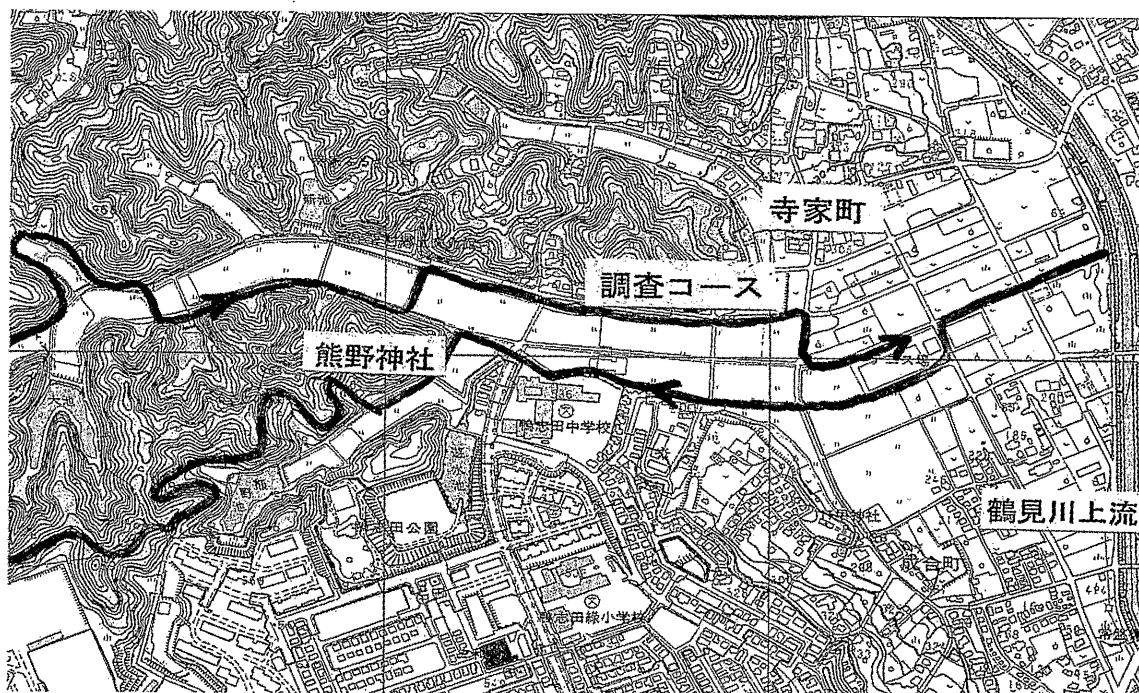
II 調査地

位置的には東京都町田市三輪町と川崎市麻生区早野に隣接している。早野と寺家町の境には鶴見川の上流が流れている。

景観的には雑木林・里山があり、多摩丘陵の中央部に位置し、海拔70～60メートル程である。丘陵と丘陵の間には水田が広がり、その奥は水田耕作が放棄されて湿地になっている。かつての早害



調査地



調査コース

用の「むじな池」とか「大池」と呼ばれるため池があり、小川も流れている。また畑などもある。このように環境の変化に富んだ地域で、植生の多様性を垣間見ることができる。

調査コースは鶴見川の上流に位置する寺家橋を起点にしてテニスコートや畑及び水田を通り四季の家に出て、熊野神社を左に折れた少し先から雑木林に入り尾根道に出る。尾根道に沿って、回りこむように大池に出て、水田奥の湿地を見て反対側の水田と林縁を調査してむじな池に出てから左に曲がり林縁と畑を通して戻るコースである。

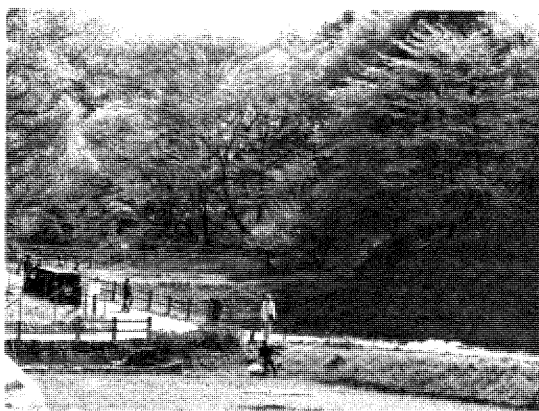
地質的には基盤は上総層群王禅寺層で、特に注目すべき点は侵食が進んで関東ローム層がないということである。尾根道は王禅寺層ということになる。この点で、川崎市多摩区にある、青少年科学館がある生田緑地とは全く異なる。



調査地景観



調査地景観



調査地景観

Ⅲ 調査目的

第一には記録を残すということである。20年前に出版された「寺家の自然」の植物に関する記録が今回の調査で役に立ったのと同様である。

近年、温暖化が言及されている。数年後又は数十年後に同一地域・コースで調査すれば花期の違いから温暖化が進んだ結果、その影響をどんな植物が特にうけているのかを知ることが可能である。又、温暖化は別にしても後年、調査することにより植物の消長を知ることができる。在来種は減り帰化植物が増えていくことは想像に難くない。他に今回の調査結果からどのような植物の花期が長いのか短いのかなども分かる。

前述したように寺家ふるさと村には多数の人が訪れる。これらの中には植物に興味を持つ方もいる。調査中に植物の名前を尋ねられたことが数度ある様に初心者の方もいる。この様な方には花暦の花期から図鑑をもとに植物名を知る手助けになると考えられる。初心者以外の方にも花暦は植物名を知る上で有効であろう。

第二には川崎市に生育する植物との比較である。基本的には生物は行政区とは無関係である。横浜市だからと言って川崎市の植物と異なる特別な理由はない。あるとすれば立地の差異、自然度などによるものである。寺家町は多摩丘陵に属し、川崎市で自然がよく残る地域も多摩丘陵に属する。まして自然がよく残り多摩丘陵に属する川崎市麻生区早野と寺家町は2キロメートル位しか離れていない。植生を左右する気温や雨量の違いはさほどない。従って川崎市近隣の植物を調べることに、その結果として比較できればよいと考えた。

Ⅳ 調査方法

調査コースを地図上に示した通り、先ず調査コースを設け定期的、約10日に1度の割合で観察し、花が咲いている植物名を記録用紙に記入した。花期調査であるためにコースを変更してしまうと正確な資料が得られないため調査コースは必要である。だから植物の種数は調査コースで観察したものとなり、全てを網羅することはできない。またコースは一部を除いては人がよく通る道となるために帰化植物が増える傾向がある。

花が一輪でも咲いていれば花期とした。調査地域が広く微環境や微気象に変化があるので、今日はこちらで咲きだし10日後にこちらで咲きだすこともあるので植物によっては花期が長くなることもある。勿論、本来的に花期の長い植物もある。

花卉がない植物の場合は種の同定はおしべとめしべをもって花期にすることになる。カヤツリグサ科の花の時期はめしべやおしべでの同定は困難

である。このような時は果実ができるまで待たなければならない。イネ科やイグサ科などでもおしべとめしべを観察するのにルーペが必要であり、おしべとめしべを見落とす可能性がある。これらの植物の大半も果実を元に同定することが多いので花期が長くなる傾向がある。反対に短くなる可能性もあろう。これらは花期調査の難しさと言える。

基本的に調査は一人で行ったが、年後半は月に一回の割合で植物同好会の方々に随行をお願いした。一人で観察するのと複数で観察するのでは、花の出現数に変化がでた。一人よりも複数の方が約10パーセント程、花の出現数が多いのである。一人ではどうしても見落としが出てしまう。精査の問題であり、複数で観察すべきであろう。

調査期間は2007年1月23日から2007年12月23日までであった。

Ⅴ 調査結果及び考察

この調査コースで411種の花暦を作ることができた。20年前の「寺家の自然」での植物目録では種子植物は571種であった。この72パーセントを同一コースで調査できたのだから決して少ない数字であろう。

花暦は本文の後に表としてまとめてある。和名の後に括弧で科名を記入した。帰化植物には*印を付した。これらは神奈川県植物誌2001(詳細には後述の文献を参照のこと、以下神奈川県植物誌という)に拠った。花期の始めと終わりは矢印で示した。満開はその中央と考えていい。狂い咲きも別個に示した。以下、個別に項目を挙げて結果を述べ、必要に応じて考察したい。

1 花が綺麗な植物

コースを歩いていて花が綺麗なために驚いて立ち止まることがある。このようなシーンに再三出会った。このことは寺家の自然が豊かなことを物語っている。ここでは単一の植物の集まりを群落として紹介する。参考のために花の色を記す。

(1) シロイトスゲ群落(カヤツリグサ科) 2007. 3. 29

小さなスギ植林内の湿った場所にスゲ属の白い単性花が群落を作って生育していた。この時点では種の同定は不可能である。一応、写真を撮って果実ができたら同定した。スゲ属の植物は目立たない植物の代表であるが、群落を作ると見事としかいえない。後日、果実ができたら、鱗片や果胞、茎の基部・鞘の色、根などを詳細に調べてシロイトスゲであることが判明した。



(2)アキノタムラソウ群落(シソ科) 2007. 7. 5

花冠(花)は青紫色。「寺家の自然」の植物目録には丹沢や箱根に生育するナツノタムラソウの記載があるので、もしかしたら発見できるかも知れないと調査した。花冠内の毛環が基部にあるならアキノタムラソウ、中央ならナツノタムラソウとして花冠を裂いてルーペで覗いてみたが、明確にナツノタムラソウと同定できるものはなかった。ともかくアキノタムラソウが群落をあちこちで作っていた。



(3)チダケサシ群落(ユキノシタ科) 2007. 7. 19

花の色はうすい紅だが、場所によっては白に近いものがある。なぜ場所によって或いは株によってこのように花の色が異なるのか記した文献を見たことはない。長野県ではきのこのチチダケを取ってこの茎に刺して持ち帰ったことからこの名がついたという。

葉は2回又は3回羽状複葉。小葉には不整の鋭い鋸歯があり、茎の下部などには長い毛がある。群落を作って咲いているのは綺麗である。



(4)ダイコンソウ群落(バラ科) 2007. 7. 19

花は黄色。全体に柔らかい毛が密生する。根生葉は羽状複葉でダイコンの葉に似ているのでこの名がある。高さは60~100センチメートル程の多年草である。

寺家では林縁が草原になっている斜面など数箇所群落を作り、黄色なのでよく目につく植物である。



(5)ミズタマソウ群落(アカバナ科) 2007. 7. 26

花の色は白。ガク片2、おしべ2、花弁2とミズタマソウ属の植物は2数性であるので、すぐ名がわかるが、花は小さいので調べるにはルーペが必要であろう。高さ20~60センチメートルの多年草。果実にはかぎ状の毛が密生する。

露に光る果実を水玉に見立てて、ミズタマソウということである。

花期が長い。むじな池と熊野神社の間、むじな池寄りの舗装された道路の林縁に大群落を作っていた。林縁の反対側は水田になっていて、小川が流れている。



(6)センニンソウ群落(キンボウゲ科) 2007. 8. 24

ガク片の色は白。日向を好む植物。葉は3～7枚の小葉からなる奇数羽状複葉。葉柄によって他の物に絡みつく特徴がある。ガク片は4枚。おしべ、めしべ共に多数だが、花弁はない。有毒植物。仙人掌と書き、瘦果の白い毛を仙人の髭とか白髪に例えたらしい。

熊野神社の斜面にいくつかの群落を作っていたが、他の場所でも見かけた。



(7)ユウガギク群落(キク科) 2007. 8. 24

花の色は白。林縁の草原に生育する。葉は多少ざらつき、単葉だが茎の下部の葉は深裂する傾向があるのが特徴。果実の冠毛は短い。

水田の土手の斜面やミズタマソウ群落がある場所より熊野神社寄りの林縁に大群落を作っていた。結構、花期は長い。

柚が菊、柚香菊という意味らしい。



(8)ツリガネニンジン群落(キキョウ科) 2007. 9. 16

花冠(花)は青紫色。高さ60～90センチメートルの多年草。全体に毛があり、輪生、対生、互生と変化に富む。花は釣鐘形となり、下垂する。

名は花が釣鐘に似ており、根は朝鮮ニンジンに似ていることに由来すると言う。

林縁の斜面の草原に群落を作り或いは点在するように咲いていた。又、水田の小川の土手にも群落を作っていた。

花が綺麗なためか花を手にして歩いている人に幾度か出会った。



(9)ヒガンバナ群落(ヒガンバナ科) 2007. 10. 5

花の色は赤。人里の近くに生育する多年草。花被片6、おしべ6。

秋の彼岸の頃に咲くのでこの名がある。

熊野神社の階段わきの斜面に見事な群落を作っていた。



(10)ヤマハッカ群落(シソ科) 2007. 10. 17

花の色は紫。高さ 60～90 センチメートルの多年草。茎は四角形で葉は対生し、茎と葉共に多少の毛がある。葉には鋸歯があり、葉柄には葉の翼が残る。秋に花をつける。

寺家では林縁の小川が流れている斜面とか水田のわきの小川の土手に群落を作っていた。



以上 10 種、花が綺麗な植物、群落を作っていてよく目に付く植物を掲載した。花の色を各説明文の冒頭に示したので、花暦と一対にして参照して頂きたい。

2 個体数が少ない植物

ここでいう個体数の少ない植物とは神奈川県においてである。文献は前述した神奈川県植物誌による。

調査目的の第二としての川崎市との比較においては、ツクバキンモンソウ（シソ科）が挙げられる。この植物は県下でもそれ程分布しておらず、川崎市には生育していない。同じ多摩丘陵で、ここから約 2 キロメートルしか離れていない川崎市麻生区早野の多摩丘陵にも生育していない。

なぜなのかは不明である。地形などの微環境、

地質—関東ローム層が寺家にはないということなどが考えられるが、他の場所の生育環境など比較して見ないとなんとも言えない。ただ群落を作って生育しているのは事実である。

他に川崎市では生育していない植物としてはホソバシオデ（ユリ科）がある。これは箱根あたりに生えているが、丘陵地にもあるということで、精査すれば川崎市でも見つかる可能性がある。「寺家の自然」の植物目録にもないので、寺家では今回が初めての発見かも知れない。これらのことが川崎市との比較と言える。

川崎市にもあるが県下では少ない植物としてはイヌアワ（イネ科）、オガルカヤ（イネ科）、コシロネ（シソ科）、オオハリイ（カヤツリグサ科）などがある。以下、ツクバキンモンソウ、ホソバシオデを含めてこれらの説明をしたい。

(1)ツクバキンモンソウ(シソ科) 2007. 4. 10

茎は開花後も直立し、伸長して這わず、葉の裏は紫色をおびる。花の色は白色か淡紅白色。タチキランソウに似るといふ。ニシキゴロモは主に日本海側に生え、本種は太平洋側に生育する。花冠上唇は発達せず、長さは 1 ミリメートルもない。



(2)ホソバシオデ(ユリ科) 2007. 7. 19



(3)イヌアワ(イネ科) 2007. 9. 16

高さ 50~80 センチメートルの多年草。根茎を伸ばして増える。葉舌はほとんど見えず、短毛が生える。小穂の基部にノギ状の剛毛が、0~2 本つくのが特徴。また第一包穎が小穂を取り巻くのも特徴。

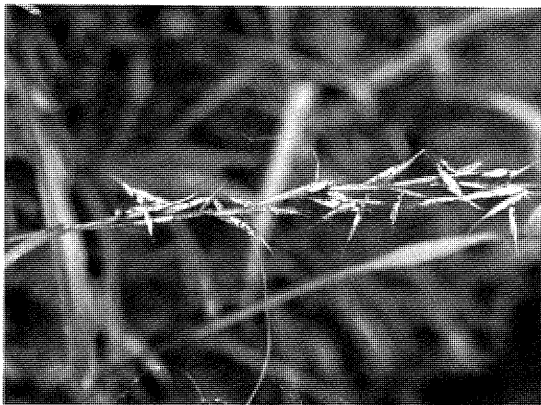
むじな池近くの林縁の草原に数株だが生育していた。



(4)オガルカヤ(イネ科) 2007. 10. 14

山野の草原に生える多年草。葉舌は三角形で 1~3 ミリメートル。20~40 センチメートルの花序は葉身を失った葉鞘の中から出て枝の先で左右に二分する。ここに数個の小穂が密接してつく。これを総といい、総は粉白色で一部、赤紫を帯びる。総は左右に 180 度開く。

水田の脇を流れる小川の土手の斜面の草原に数株だが生育していた。



(5)コシロネ(シソ科) 2007. 10. 14

高さ 15~60 センチメートル程の湿地に生える多年草。茎は四角形で葉は対生。節を除いては無毛。葉の付け根に小さな白色の唇形花を多数、密

につける。

寺家では水田脇の枯れた小川の中に数株生えていた。川崎市麻生区黒川でも見かけた。当館がある川崎市多摩区生田緑地にはヒメシロネが生育している。



(6)オオハリイ(カヤツリグサ科) 2007. 10. 17

高さ 20~30 センチメートルの多年草か一年草。茎の基部は濃い赤紫色を帯びることが多い。小穂は長さ 6~8 ミリメートル。6 個の刺針状花被片は柱基より長く、瘦果の 1.5~2 倍。

過去の文献ではセイタカハリイと混同されることがあるという。

ハリイと考えられる植物があったが、調べるのを怠ってしまった。

谷戸奥の放棄水田・湿地に生育していた。発見は 10 月と遅かった。



この他に個体数が少ない植物として、モエギスゲ(カヤツリグサ科)、キクバドコロ(ヤマノイモ科)、ミズガヤツリ(カヤツリグサ科)、クログワイ(カヤツリグサ科)、シロバナサクラタデ(タデ科)などがあるが、説明は省略する。

これまで、花が綺麗な群落、固体数が少ない植物について記した。いずれも数種が多く、このことは寺家は豊富な植物相に恵まれていることを物語っている。

3 帰化植物

帰化植物は人為的干渉と深く関係している。人がよく通る道端や里山を切り開いた造成地などによく侵入する。反対に在来種でしっかり構成されている雑木林などには侵入できない。このことから帰化植物は自然の良し悪しを知るバロメータといわれている。寺家の帰化植物はどうであろうか。

今回の調査でタチイヌノフグリ(ゴマノハグサ科)、ゲンゲ(マメ科)、ヘラオオバコ(オオバコ科)など 82 種を確認した。

これらの帰化植物で県下で分布が数箇所と少ないものはナタネタビラコとアメリカホドであったので、以下に説明文と写真を載せたい。

(1)ナタネタビラコ(キク科) 2007.6.19

葉に変化がある。下部の葉は深裂～全裂し有柄、中部の葉は裂けず短柄、上部の葉は無柄で狭卵形～披針形となる。花序は大きく複散房状。花の色は淡い黄色。県下での分布は 5 箇所である。

群落を作っていた。



(2)アメリカホド(マメ科) 2007.8.1

多年草のつる植物。葉は奇数羽状複葉で小葉は 5～7 枚。花がつく節はこぶ状にふくらみ、花は多数が密集して腋生または頂生する。

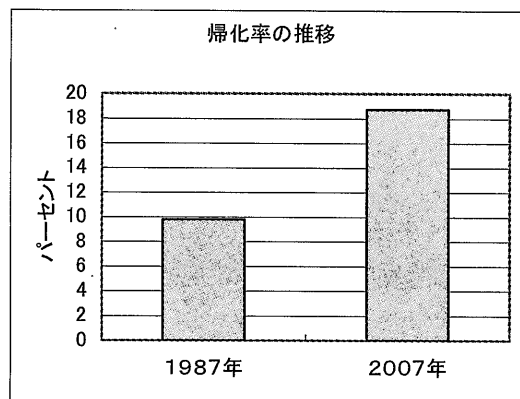
畑の鉄網状の囲いに絡み付いて、一株が生育していた。畑の脇なので栽培種の逸出かも知れない。県下では一箇所の分布である。



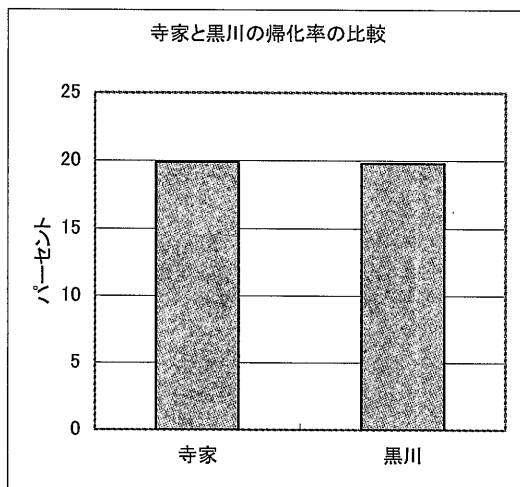
(3)帰化率

全帰化植物数を全植物数で割って 100 を掛けた値が帰化率である。寺家の帰化率は 20% であった。以前に行なった川崎市内の多摩川中流の帰化率は 43%、川崎区東扇島の帰化率は 54%、最も自然が残っている黒川での帰化率は 19.8% であるので、低い数字と言える。前述したように寺家ふるさと村には多数の人々が訪れていて、多少以上の人為的干渉を受けているはずであるが、帰化率が低いということは自然が守られているということになる。

「寺家の自然」には植物目録が収められている。この書物は丁度 20 年前に出版されたものである。この目録から帰化率を計算してみると 9.8% となる。目録は寺家の全域をくまなく調査したもので、今回のように同一コースを定期的に調査したものではないので正確な比較はできないが、おおよその目安とはなるであろう。20 年前よりは帰化植物は増えているといえる。例えばナタネタビラコ、アメリカホドなどは目録にはないのである。今までにはなかった帰化植物が侵入している。参考までに寺家の 20 年前と現在の帰化率の推移を以下にグラフを示す。



川崎市麻生区黒川の帰化率は寺家と同様に同一コースを定期的に調査して花暦を作成して、それから算出した数字である。コースも寺家と同じように人が歩く道などで、寺家と同一の条件下の帰化率と言える。川崎市では最も自然が残っていて、微環境にも富んだ地域である。調査を継続した経験から人為的干渉は寺家のほうがはるかに多く受けていて、帰化率は寺家の方がかなり高くなると推察できるが実際には寺家の方が僅かに高かっただけである。グラフにすると差がないように、数字では 0.2 パーセント程度の差である。以下に寺家と黒川の帰化率をグラフで示す。黒川の帰化率は 2005 年のものである。人為的干渉をより多く受けていても、寺家は自然が残っていると言えよう。



(4)なぜ植物相が豊かなのか

Ⅲの 1 の「花が綺麗な植物」の所の最後に、寺家は豊富な植物相に恵まれていると記した。いくつかの要因が考えられるが、そのひとつに下草刈りが挙げられるので、これについて述べたい。下草刈りは毎年行われているのか否かは不明だが、下の写真は 2007.11.9 に撮影したものである。



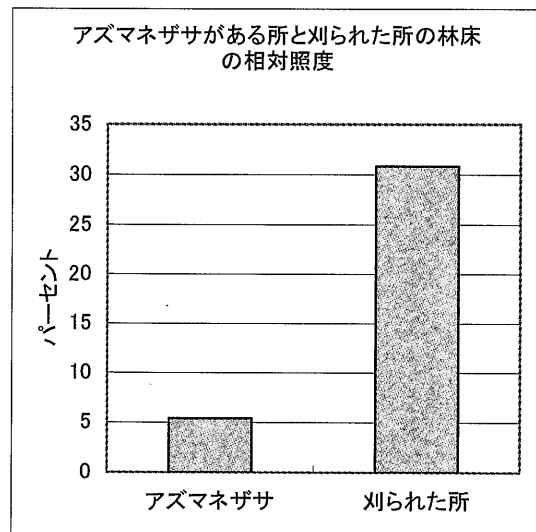
下草刈りが行われた雑木林

シラカシ林(常緑広葉樹林)と雑木林(落葉広葉樹林)の草本種数を比較すると後者の方が圧倒的に多いことはよく知られていることである。これは林床の照度の関係であり、シラカシ林は常緑のため林床に届く光が限られ、陰性の草本のみが生育可能で、種数が少なくなってしまう。これに反して雑木林は冬は落葉していることもあり、林床に光が届き陽性の草本も陰性の草本も生育可能であるため、種数が多くなる。

しかし、かつては薪炭林としての雑木林は、樹木を守るなどのために下草刈りが行われていたが、昭和 30 年代のガスなどの台頭により、薪炭林としての役目は終わり、下草刈りなどは行われなくなった。その結果、雑木林はその土地本来の自然植生に戻りつつあると言えるが、特に多摩丘陵の大半の地域がアズマネザサに優占されるに至った。

アズマネザサは耐陰性に富み(シラカシ林には生育できない)、耐寒性にも富み本州北部にまで生育している。このアズマネザサが優占すると雑木林の林床の照度はどのようになるのだろうか。

以下は 2001 年に川崎市多摩区生田緑地の雑木林で調査したアズマネザサが生えている林床の相対照度(5.4%)とアズマネザサが刈られた林床の相対照度(30.8%)をグラフにしたものである。



アズマネザサが生えている所よりアズマネザサが刈られた林床の方が 5.7 倍、照度が高くなっている。このことなどがそこに生育する種数に変化を与えている。一定面積内の種数を調べた所、アズマネザサが優占している所での草本はナガバジヤノヒゲ、ヤブコウジ、シラカシなど 5 種に対して、アズマネザサが刈られた所での草本はミツバアケビ、ミヤマナルコユリ、タチツボスミレなど 17 種であった。アズマネザサを刈ると 3.4 倍、種数が増えることになる。

寺家が植物相に恵まれているのも、綺麗な群落が多いのも下草刈りによるものと考えられる。林縁で人の通る場所でも在来種がしっかり根を生やしていれば、帰化植物は侵入しにくく、帰化率が低いことと関係しているのかも知れない。下草刈りはこの時期、晩秋がよいのだろう。冬場に林床に光が届き、早春の植物も生育しやすい。

4 花暦から

2007.1.1 から 2007.1.22 までと 2007.12.24 から 2007.12.31 までの間は調査していないので、1 年を通じての結果を述べられない。

花期が長い植物についてみる

タンポポはカントウタンポポ、セイヨウタンポポ、これらの雑種を区別できないので、まとめてタンポポ類としたが、タンポポ類(キク科)とミドリハコベ(ナデシコ科)は年中咲いていると推察していいだろう。2 月下旬から 12 月まで咲いている植物としてはノゲシ(キク科)、3 月中旬から 12 月まで咲いている植物としてはカタバミ(カタバミ科)、3 月下旬から 12 月まで咲いている植物としてはハハコグサ(キク科)、4 月中旬から 12 月まで咲いている植物としてはシロツメクサ(マメ科)、ヒメジョオン(キク科)、イヌガラシ(アブラナ科)、5 月下旬から 12 月まで咲いている植物としてはイヌタデ(タデ科)、シマスズメノヒエ(イネ科)などが挙げられる。

前年の 11,12 月から咲き出していると推察できる植物としてはオオイヌノフグリ(ゴマノハグサ科)、スズメノカタビラ(イネ科)、ハルジオン(キク科)、ホトケノザ(シソ科)、タネツケバナ(アブラナ科)、ノミノフスマ(ナデシコ科)、オニタビラコ(キク科)などが挙げられる。

狂い咲きとしてはムラサキサギゴケ(ゴマノハグサ科)、ニガナ(キク科)、アカツメクサ(マメ科)などが推察できる。

これらは今回の調査から言えることであって継続調査或いは数年後の調査が必要であろう。

5 花数の推移

調査回数は 32 回に及んだ。これらの資料を基に各回の花数(出現種数)をグラフにしたものを下に示した。

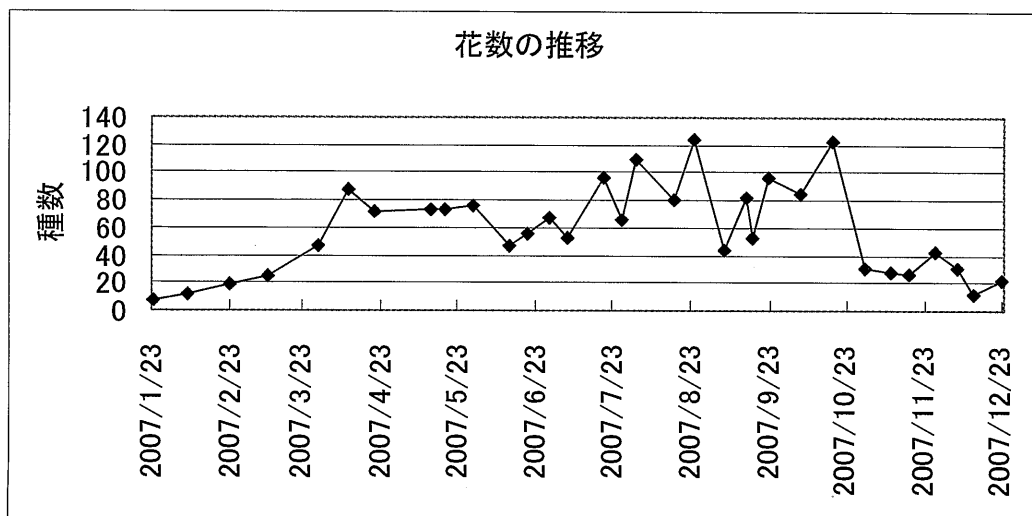
前述した様に調査を一人で行うか複数で行うかによって花数に違いが出てくる。一人の時や複数の時もあったので、グラフは相対的なものとして見て頂きたい。

1 月から 4 月にかけて少しずつ花数が増えて 4 月には 100 種ほどになる。6 月にかけて少し減り 8 月になると増える。黒川の調査の時も夏場に花数が多かったので、夏場は花が少ないというのは筆者の固定観念だろうか。10 月も花数が多いが、11 月になると急激に花数が少なくなってしまう。

花の観察の時期としては 3 月から 10 月までが適当であろう。多い時は 140 種位の花が観察できる。その他の月は紅葉、木の実、冬芽、常緑樹などの観察が好ましいようだ。

VI まとめ

調査の第一の目的は記録を残すことであった。これまでの記録としては前述したように 1987 年に刊行された「横浜ふるさと村自然と文化の会」による「寺家の自然」に記載されている目録がある。これには 571 種が収められている。これは寺家にどんな種子植物があるかを調べたものである。



今回の調査は花暦が目的であり、同一コースでの調査であった。411 種の花暦を作成することができた。

第二の目的としては、結果として川崎市域の植物と比較できればということであった。川崎には生育していない植物としてはツクバキンモンソウ(シソ科)とホソバシオデ(ユリ科)及びフジカンゾウ(マメ科)などを確認できた。

総合的に寺家の植物を見てみると「花が綺麗な植物」で述べたように単一の植物の集まり・群落が多いということである。川崎で最も自然が残っている地域の一つである黒川よりも多いと言える。多い理由の一つに下草刈りが考えられる。このような群落が多いということは寺家を訪れる人々を楽しませてくれるということであって、寺家の自然の魅力の一つになっている。

個体数の少ない植物も多い。これは里山あり、水田あり、湿地あり、小川あり、畑ありという環境の多様性と手つかずの立地があるということによるものであろう

寺家は舗装されている道路があり、毎日のように車が出入している。人が多く、かなり的人為的干渉を受けている。しかしながら帰化率は低い。自然が程よく残っていると見える。

寺家の花を中心にした観察会は4月から10月頃がよく、特に秋や夏そして春ということになる。140 種程の花が、多いときは観察できる。

VII おわりに

下記の植物は調査コース内で観察した植物であるが、花期を把握できなかったので花暦には記載できなかった。機会があれば今後、調べたい。ヤマグラ(クワ科)、ニガキ(ニガキ科)、カマツカ(バラ科)、ヤマハゼ(ウルシ科)、ムラサキシキブ(クマツヅラ科)、ヌルデ(ウルシ科)、アオイスミレ(スミレ科)、アワブキ(アワブキ科)、マツバスゲ(カヤツリグサ科)、キッコウハグマ(キク科)。

Ⅱの「調査地」において「寺家ふるさと村」は町田市三輪町と川崎市麻生区早野に隣接していると述べた。最近、川崎市、町田市、横浜市が連携して「緑(みどり)と農(みのり)の里めぐり」と称して、川崎市麻生区岡上地区及び早野地区、町田市三輪地区、横浜市青葉区寺家地区の散策マップを刊行し、これらの地区の保全推進の一環として散策やハイキングを勧めている。これらの地区は多摩丘陵に属し、里山や田園風景がよく残っている所である。本稿が保全推進の一助になれば幸いである。

本稿を作成するに当たり、学芸員実習生の糠本さやか氏には花暦素表の作成のお手伝いを頂きました。また、植物同好会の長嶋紘一、矢野敬二、母袋重左衛門、稲木陽子、川上淳子、新井佳寿子

の各諸氏には時折、現地の調査に同行して頂き助言・指導を頂きました。これらの方々に対して末筆ながら深く感謝し厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) 神奈川県植物誌調査会編(2001)神奈川県植物誌(2001).神奈川県生命の星・地球博物館
- 2) 牧野富太郎(1974)牧野新日本植物図鑑.北隆館
- 3) 寺家ふるさと村自然と文化の会(1987)寺家の自然
- 4) 吉田三夫(2002)林と草本.青少年科学館紀要 13:37-47

寺家の花暦

和名	帰化	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
オオイヌフグリ(ゴマノハグサ科)	*						↑						
ヒメオドリコソウ(シソ科)	*				↑								
ミドリハコベ(ナデシコ科)													
スズメノカタビラ(イネ科)							↑						
ハルジオン(キク科)	*					↑							
タチツボスミレ(スミレ科)					↑								
ホトケノザ(シソ科)					↑								
ツルニチニチソウ(キョウチクトウ科)	*		↓			↑							
タネツケバナ(アブラナ科)			↓		↑								
タンポポ類(キク科)	*		↓										
カラシナ(アブラナ科)			↓			↑							
ノミフスマ(ナデシコ科)			↓		↑								
ナズナ(アブラナ科)			↓		↑								
コハコベ(ナデシコ科)	*		↓		↑								
ノゲシ(キク科)	*		↓									↑	
オランダミミナグサ(ナデシコ科)	*		↓				↑						
オオアラセイトウ(アブラナ科)	*		↓			↑							
オニノゲシ(キク科)	*		↓			↑							
オニタビラコ(キク科)			↓				↑						
コオニタビラコ(キク科)			↓		↑								
ユキヤナギ(バラ科)				↓	↑								
カタバミ(カタバミ科)				↓								↑	
ケキツネノボタン(キンポウゲ科)				↓				↑					
ミヤマカンズゲ(カヤツリグサ科)				↓	↑								
ウグイスカグラ(スイカズラ科)				↓	↑								
フキ(キク科)				↓	↑								

和 名	帰化	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
ヤハズノエンドウ(マメ科)					↓	↑							
ウシハコベ(ナデシコ科)					↓								↑
ハハコグサ(キク科)					↓								↑
キラソウ(シソ科)					↓	↑							
ヤマザクラ(バラ科)					↓								
コブシ(モクレン科)					↓	↑							
ヘビイチゴ(バラ科)					↓	↑							
ムラサキサギゴケ(ゴマノハグサ科)					↓	↑							
タチヌスフグリ(ゴマノハグサ科) *					↓	↑							
スズメノエンドウ(マメ科)					↓	↑							
タガラシ(キンポウゲ科)					↓	↑							
スズメノテッポウ(イネ科)					↓	↑							
ゲンゲ(マメ科) *					↓	↑							
カズノコグサ(イネ科)					↓	↑							
ミツバツチグリ(バラ科)					↓	↑							
ハナイバナ(ムラサキ科)					↓	↑		↑					—
ケスゲ(カヤツリグサ科)					↓	↑							
ニリンソウ(キンポウゲ科)					↓	↑							
ナガバノスミレサイシン(スミレ科)					↓	↑							
ニオイタチツボスミレ(スミレ科)					↓	↑							
カキドオシ(シソ科)					↓	↑							
ムシクサ(ゴマノハグサ科)					↓	↑							
オカスミレ(スミレ科)					↓	↑							
アケビ(アケビ科)					↓	↑							
スイバ(タデ科)					↓	↑							
トウダイグサ(トウダイグサ科)					↓	↑							
ヘラオオバコ(オオバコ科) *					↓	↑							

和 名	帰化	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
クサイチゴ(バラ科)					↕								
シロツメクサ(マメ科)	*				↕							↑	
メアオスゲ(カヤツリグサ科)					↕	↑							
キツネアザミ(キク科)					↕								
チガヤ(イネ科)					↕	↑							
オヘビイチゴ(バラ科)					↕	↑							
ノボロギク(キク科)	*				↕							↑	
ノジスミレ(スミレ科)					↕								
ヒメジョオン(キク科)	*				↕							↑	
セトガヤ(イネ科)					↕								
サギゴケ(ゴマノハグサ科)					↕								
ミミナグサ(ナデシコ科)					↕								
トキワハゼ(ゴマノハグサ科)					↕						↑		
イヌムギ(イネ科)	*				↕				↑				
ヤエムグラ(アカネ科)					↕	↑							
キュウリグサ(ムラサキ科)					↕	↑							
ヤブタビラコ(キク科)					↕	↑							
ウラジロチチコグサ(キク科)	*				↕				↑				
アメリカスミレサイシン(スミレ科)	*				↕								
ヤブヘビイチゴ(バラ科)					↕								
カワラスゲ(カヤツリグサ科)					↕								
ホウチャクソウ(ユリ科)					↕								
ツクバキンモンソウ(シソ科)					↕								
チゴユリ(ユリ科)					↕								
タマノカンアオイ(ウマノスズクサ科)					↕								
マルバアオダモ(モクセイ科)					↕								
イヌザクラ(バラ科)					↕								
コジュズスゲ(カヤツリグサ科)					↕	↑							

和 名	帰化	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
モミジイチゴ(バラ科)					↕								
ハナカタバミ(カタバミ科)	*				↕	↕	↕						
ムラサキケマン(ケシ科)					↕	↕							
スズメノヤリ(イグサ科)					↕	↕							
ヒメハギ(ヒメハギ科)					↕	↕	↕						
クサボケ(バラ科)					↕	↕							
ヒカゲスゲ(カヤツリグサ科)					↕	↕							
キジムシロ(バラ科)					↕	↕							
アオキ(ミズキ科)					↕	↕							
シロイトスゲ(カヤツリグサ科)					↕	↕							
ニガナ(キク科)					↕	↕	↕		↕		↕		
オオジシバリ(キク科)					↕	↕	↕		↕		↕		
ギシギシ(タデ科)					↕	↕	↕						
ミゾイチゴツナギ(イネ科)					↕	↕	↕						
イヌガラシ(アブラナ科)					↕	↕	↕					↕	
アオスゲ(カヤツリグサ科)					↕	↕	↕						
ヌカボ(イネ科)					↕	↕	↕						
コウゾ(クワ科)					↕	↕	↕						
ツボスミレ(スミレ科)					↕	↕	↕						
ミヤマナルコユリ(ユリ科)					↕	↕	↕						
クヌギ(ブナ科)					↕	↕	↕						
ウワミズザクラ(バラ科)					↕	↕	↕						
タガネソウ(カヤツリグサ科)					↕	↕	↕						
コナラ(ブナ科)					↕	↕	↕						
モエギスゲ(カヤツリグサ科)					↕	↕	↕						
アメリカフウロ(フウロソウ科)	*					↕	↕						
ヒルザキツキミノソウ(アカバナ科)	*					↕	↕	↕				↕	
ムラサキカタバミ(カタバミ科)	*					↕	↕	↕				↕	

和 名	帰化	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
ゼニアオイ(アオイ科)	*					↓	↑		↑				
トボシガラ(イネ科)						↑	↑						
マスクサ(カヤツリグサ科)						↑	↑						
ヒメヨツバムグラ(アカネ科)						↑	↑						
カニツリグサ(イネ科)						↑	↑						
イボタノキ(モクセイ科)						↑	↑						
コヒルガオ(ヒルガオ科)						↑	↑						
ウツギ(ユキノシタ科)						↑	↑						
ミズキ(ミズキ科)						↑	↑						
フジ(マメ科)						↑	↑						
ナガバギンギシ(タデ科)	*					↑	↑						
カモジグサ(イネ科)						↑	↑						
ホソムギ(イネ科)	*					↑	↑						
トウバサ(シソ科)						↑	↑						
ムツオレグサ(イネ科)						↑	↑						
クサイ(イグサ科)						↑	↑						
ノアザミ(キク科)						↑	↑						
ナワシロイチゴ(バラ科)						↑	↑						
イグサ(イグサ科)						↑	↑						
アオカモジグサ(イネ科)						↑	↑						
カモガヤ(イネ科)	*					↑	↑						
ガマズミ(スイカズラ科)						↑	↑						
アマドコロ(ユリ科)						↑	↑						
オヤブヅラミ(セリ科)						↑	↑						
シラスゲ(カヤツリグサ科)						↑	↑						
ニワゼキショウ(アヤメ科)	*					↑	↑						
コバンソウ(イネ科)	*					↑	↑						
ネズミムギ(イネ科)	*					↑	↑						

和 名	燐化	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
ヤマツツジ(ツツジ科)						↔							
コモチマンネングサ(ベンケイソウ科)						↔	↑						
ソバ(タデ科)						↓	↑						
ツメクサ(ナデシコ科)						↓	↑						
コヌカグサ(イネ科)						↓	↑						
コウゾリナ(キク科)						↓	↑						
オオバコ(オオバコ科)						↓						↑	
オニウシノケグサ(イネ科)	*					↓	↑						
ミヤコグサ(マメ科)						↓	↑						
ホオノキ(モクレン科)						↔							
ノイバラ(バラ科)						↔							
オカタツナミソウ(シンソ科)						↔							
エゾノギシギシ(タデ科)	*					↓	↑						
アレチギシギシ(タデ科)	*					↓	↑						
センダン(センダン科)						↔	↓	↑					
ヤブジラミ(セリ科)						↓	↑						
サナエタデ(タデ科)						↔							
キクバドコロ(キク科)						↔							
アカシヨウマ(ユキノシタ科)						↔							
エゴノキ(エゴノキ科)						↓	↑						
ウマノミツバ(セリ科)						↓	↑						
ジュズスゲ(カヤツリグサ科)						↔							
ムラサキマムシグサ(サトイモ科)						↔							
ドジョウツナギ(イネ科)						↔							
ゴンズイ(ミツバウツギ科)						↓	↑						
キツネノボタン(キンポウゲ科)						↓	↑						
アゼナルコ(カヤツリグサ科)						↔							
クサヨシ(イネ科)						↔							
ゴウソ(カヤツリグサ科)						↔							

和 名	帰化	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
ナルコユリ(ユリ科)						↔	↔						
オオフサモ(アリノトウグサ科)	*					↔	↔						
イヌタデ(タデ科)						↔							↑
クリ(ブナ科)						↔	↔						
シマスズメノヒエ(イネ科)	*					↔	↔						↑
ノビル(ユリ科)						↔	↔						
ナガミヒナゲシ(ケシ科)	*					↔	↔						
ヤマホタルブクロ(キキョウ科)						↔	↔						
ヒルガオ(ヒルガオ科)						↔	↔						
ハキダメギク(キク科)	*					↔	↔						↑
アカツメクサ(マメ科)	*					↔	↔						
コウガイゼキショウ(イグサ科)						↔	↔						
ナタネタビラコ(キク科)	*					↔	↔						
ツユクサ(ツユクサ科)						↔	↔						
アキノタムラソウ(シソ科)						↔	↔						↑
オカトラノオ(サクラソウ科)						↔	↔						
オオアワガエリ(イネ科)	*					↔	↔						
タカトウダイ(トウダイグサ科)						↔	↔						↑
ヤマニガナ(キク科)						↔	↔						
ヨウシュヤマゴボウ(ヤマゴボウ科)	*					↔	↔						
シロバナオオバジャノヒゲ(ユリ科)						↔	↔						
ユウゲシヨウ(アカバナ科)	*					↔	↔						↑
ハイコヌカグサ(イネ科)	*					↔	↔						
クマノミズキ(ミズキ科)						↔	↔						
タケニグサ(ケシ科)						↔	↔						
ジャノヒゲ(ユリ科)						↔	↔						
イヌビエ(イネ科)						↔	↔						↑
ハマスゲ(カヤツリグサ科)						↔	↔						↑

和 名	帰化	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
エノコグサ(イネ科)								↓		↑			
オオエノコロ(イネ科)								↓		↑			
チチコグサモドキ(キク科)	*						↑↓						
コセンダングサ(キク科)	*						↓						↑
ヤブカンゾウ(ユリ科)							↑↓	↑					
カラスビシャク(サトイモ科)							↑↓						
ヤマカモジグサ(イネ科)							↑						
ヤブマオ(イラクサ科)							↓		↑				
ミズヒキ(タデ科)							↓			↑			
オニドコロ(ヤマノイモ科)							↓		↑				
ヒヨドリバナ(キク科)							↓				↑		
ムラサキニガナ(キク科)							↑↓	↑					
ヤマムグラ(アカネ科)							↑↓						
フタリシズカ(センリョウ科)							↑↓						
チゴザサ(イネ科)							↓						
ミゾカクシ(キキョウ科)							↓			↑			
オオチドメ(セリ科)							↑↓						
ウツボグサ(シン科)							↓	↑					
コマツナギ(マメ科)							↓				↑		
アメリカアゼナ(ゴマノハグサ科)	*						↓			↑			
キツネガヤ(イネ科)							↓						
ヤブガラシ(ブドウ科)							↓			↑			
リョウブ(リョウブ科)							↓			↑			
ミチヤナギ(タデ科)							↓				↑		
ワルナスビ(ナス科)	*						↓			↑			
オシロイバナ(オシロイバナ科)	*						↓					↑	
ムクゲ(アオイ科)	*						↓						
オヒシバ(イネ科)							↓			↑			

和 名	帰化	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
コゴメガヤツリ(カヤツリグサ科)								↕	↗	↗			
アキノエノコログサ(イネ科)								↕	↗	↗			
セリ(セリ科)								↕	↗	↗			
アキカラマツ(キンポウゲ科)								↕	↗	↗	↗		
イヌヌマトラノオ(サクラソウ科)								↕	↗	↗			
カラスウリ(ウリ科)								↕	↗	↗			
カナムグラ(クワ科)								↕	↗	↗			
ヘクソカズラ(アカネ科)								↕	↗	↗			
ノブドウ(ブドウ科)								↕	↗	↗			
ヒナタイノコズチ(ヒユ科)								↕	↗	↗			
ツルニガクサ(シンソ科)								↕	↗	↗			
ダイコンソウ(バラ科)								↕	↗	↗	↗		
サジガクビソウ(キク科)								↕	↗	↗			
ミズタマソウ(アカネ科)								↕	↗	↗	↗		
ヒメヤブラン(ユリ科)								↕	↗	↗			
オオカモメヅル(ガガイモ科)								↕	↗	↗			
ヤマユリ(ユリ科)								↕	↗	↗			
イヌホタルイ(カヤツリグサ科)								↕	↗	↗			
オモダカ(オモダカ科)								↕	↗	↗	↗		
ホタルブクロ(キキョウ科)								↕	↗	↗			
チダケサシ(ユキノシタ科)								↕	↗	↗			
ヒデリコ(カヤツリグサ科)								↕	↗	↗	↗		
ナルコビエ(イネ科)								↕	↗	↗			
ザクロソウ(ザクロソウ科)								↕	↗	↗			
ホナガイヌビユ(ヒユ科)	*							↕	↗	↗			
イヌビユ(ヒユ科)								↕	↗	↗	↗		
ノチドメ(セリ科)								↕	↗	↗			
ユウガギク(キク科)								↕	↗	↗	↗	↗	

和 名	帰化	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
ホソバシオデ(ユリ科)								↕	↕				
シオデ(ユリ科)								↕	↕				
オオミゾソバ(タデ科)								↕	↕	↗			
ウシノシツペイ(イネ科)								↕	↕				
カントウヨメナ(キク科)								↕	↕	↗			
アカネ(アカネ科)								↕	↕	↗			
センニンソウ(キンポウゲ科)								↕	↕	↗			
ノコンギク(キク科)								↕	↕	↗			
アオツヅラフジ(ツツラフジ科)								↕	↕	↗			
ミツバ(セリ科)								↕	↕	↗			
ベニバナボロギク(キク科)	*							↕	↕	↗			
ツリガネニンジン(キキョウ科)								↕	↕	↗			
ノササゲ(マメ科)								↕	↕	↗			
メマツヨイグサ(アカバナ科)	*							↕	↕	↗			
ヨモギ(キク科)								↕	↕	↗			
アレチノギク(キク科)	*							↕	↕	↗			
ニラ(ユリ科)								↕	↕	↗			
ホテイアオイ(ミズアオイ科)	*							↕	↕	↗			
アメリカホド(マメ科)	*							↕	↕	↗			
コスモス(キク科)	*							↕	↕	↗			
カクトラノオ(シソ科)	*							↕	↕	↗			
ミソハギ(ミソハギ科)								↕	↕	↗			
マルバハッカ(シソ科)	*							↕	↕	↗			
ヤナギハナガサ(クマツヅラ科)	*							↕	↕	↗			
コニシキンウ(トウダイグサ科)	*							↕	↕	↗			
ヒメムカシヨモギ(キク科)	*							↕	↕	↗			
ヒカゲイノコズチ(ヒユ科)								↕	↕	↗			
クサギ(クマツヅラ科)								↕	↕	↗			

和 名	帰化	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
アメリカタカサブロウ(キク科)	*								↓			↑	
オオイスダデ(タデ科)								↓		↑			
コガマ(ガマ科)								↓	↑				
トキンソウ(キク科)								↓		↑			
アマチャヅル(ウリ科)								↓	↑				
コケオトギリ(オトギリソウ科)								↓	↑				
ツルボ(ユリ科)								↓	↑				
ヤマホトトギス(キキョウ科)								↓		↑			
コバノカモメヅル(ガガイモ科)								↓	↑				
ヤマハツカ(シン科)								↓			↑		
フレモコウ(バラ科)								↓			↑		
メヒシバ(イネ科)								↓		↑			
ヌスビトハギ(マメ科)								↓			↑		
キツネノマゴ(キツネノマゴ科)								↓				↑	
ヤブハギ(マメ科)								↓	↑				
キンミズヒキ(バラ科)								↓			↑		
トキリマメ(マメ科)								↓	↑				
オオバギボウシ(ユリ科)								↓	↑				
スズメノヒエ(イネ科)								↓			↑		
シシウド(セリ科)								↓	↑				
オミナエシ(オミナエシ科)								↓	↑				
ハナタデ(タデ科)								↓			↑		
オオアレチノギク(キク科)	*							↓		↑			
ヤブラン(ユリ科)								↓	↑				
ヒメコロ(ヤマノイモ科)								↓	↑				
アゼナ(ゴマノハグサ科)								↓			↑		
クズ(マメ科)								↓		↑			
ヒロハホウキギク(キク科)	*							↓			↑		

和 名	帰化	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
ケヤブハギ(マメ科)									↓	↑			
トダシバ(イネ科)									↓	↑			
ヒメキンミズヒキ(バラ科)									↓	↑			
テンツキ(カヤツリグサ科)									↓	↑			
タマガヤツリ(カヤツリグサ科)									↓	↑			
アゼガヤツリ(カヤツリグサ科)									↓	↑			
キバナガンクビンウ(キク科)									↓	↑			
コメシバ(イネ科)									↓	↑			
ケチヂミザサ(イネ科)									↓	↑			
アメリカイヌホズキ(ナス科)	*								↓	↑			
チヨウジタデ(アカバナ科)									↓	↑			
ヒメヒラテソウ(カヤツリグサ科)									↓	↑			
ブタクサ(キク科)	*								↓	↑			
ヤマノイモ(ヤマノイモ科)									↓	↑			
アキノノゲシ(キク科)									↓	↑			
カゼクサ(イネ科)									↓	↑			
タイアザミ(キク科)									↓	↑			
シロザ(アカザ科)									↓	↑			
キンエノコロ(イネ科)									↓	↑			
タイヌビエ(イネ科)									↓	↑			
オオニシキンウ(トウダイグサ科)	*								↓	↑			
ゲンノシヨウコ(フウロソウ科)									↓	↑			
アキメシバ(イネ科)									↓	↑			
ヒメクグ(カヤツリグサ科)									↓	↑			
ノガリヤス(イネ科)									↓	↑			
ナキリスゲ(カヤツリグサ科)									↓	↑			
フジカンゾウ(マメ科)									↓	↑			

和 名	帰化	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
ヤブタバコ(キク科)										↕	↗		
オオブタクサ(キク科)	*									↕	↗		
スカギビ(イネ科)										↕	↗		
エビヅル(ブドウ科)										↕	↗		
クサマオ(イラクサ科)										↕	↗		
ノハラアザミ(キク科)									↓				↗
ハイヌメリ(イネ科)										↕	↗		
クログワイ(カヤツリグサ科)										↕	↗		
ナンバンギセル(ハマウツボ科)										↕	↗		
アレチヌスビトハギ(マメ科)	*									↕	↗		
マメアサガオ(ヒルガオ科)	*									↕	↗		
オオオナモミ(キク科)	*									↕	↗		
ヨシ(イネ科)										↕	↗		
ナンバンカラムシ(イラクサ科)	*									↕	↗		
カヤツリグサ(カヤツリグサ科)										↕	↗		
コシロノセンダングサ(キク科)	*									↕	↗		↗
イボクサ(ツユクサ科)										↕	↗		
ヒガンバナ(ヒガンバナ科)										↕	↗		
ネズミノオ(イネ科)										↕	↗		
キバナアキギリ(シソ科)										↕	↗		
ネコハギ(マメ科)										↕	↗		
マルバハギ(マメ科)										↕	↗		
アメリカセンダングサ(キク科)	*									↕	↗		
ツルマメ(マメ科)										↕	↗		
ヤブマメ(マメ科)										↕	↗		
ダンドボロギク(キク科)	*									↕	↗		
ヒメジソ(シソ科)										↕	↗		
ヤノネグサ(タデ科)										↕	↗		

和 名	帰化	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
アブラススキ(イネ科)										↕	↗		
ノダケ(セリ科)										↕	↗		
コナギ(ミズアオイ科)										↕	↗		
アゼトウガラシ(ゴマノハグサ科)										↕	↗		
ツルニンジン(キキョウ科)										↕	↗		
イヌコウジュ(シソ科)										↕	↗		
スズメウリ(ウリ科)										↕	↗		
ススキ(イネ科)										↕	↗		
オオイヌホオズキ(ナス科)	*									↕	↗		
チカラシバ(イネ科)										↕	↗		
シラヤマギク(キク科)										↕	↗		
コチヂミザサ(イネ科)										↕	↗		
アシボソ(イネ科)										↕	↗		
コブナグサ(イネ科)										↕	↗		
コツブキンエノコロ(イネ科)										↕	↗		
サヤヌカグサ(イネ科)										↕	↗		
ヤナギタデ(タデ科)										↕	↗		
イヌアワ(イネ科)										↕	↗		
シロバナサクラタデ(タデ科)										↕	↗		
オオハライ(カヤツリグサ科)										↕	↗		
キバナコスモス(キク科)	*									↕	↗		
セイタカアワダチソウ(キク科)	*									↕	↗		
メドハギ(マメ科)										↕	↗		
イヌシヨウマ(キンポウゲ科)										↕	↗		
クワクサ(クワ科)										↕	↗		
ミゾソバ(タデ科)										↕	↗		
ホソバアキノゲシ(キク科)										↕	↗		
キンモクセイ(モクセイ科)										↕	↗		
オギ(イネ科)										↕	↗		

[illegible]

